

「報恩」の昔ばなし

報恩の昔話、教えてください！千代子せんせ〜い！！

札幌報恩会は、来年2018年に創立100周年を迎える準備を徐々に始めています。

広報誌「報恩」でも、100周年に向けてお話をしてもらえないかなあ…と、退職して早12年、今年の6/10まで理事として任務を続けていただいた“吹矢千代子”さん（通称；千代子せんせい）に原稿をお願いしました。久々のご登場です！

人生50年の昔から今や100年の時代になろうとしています。法人も来年11月で100年を迎えます。創立者、小池九一先生の思いが地下水のように脈々と流れ受け継がれています。お預かりした子供たちを我が子同然に育て、子供達は先生夫婦を、お父さん、お母さんと呼んでいたと聞いています。私は九一先生にお会いしたことはありませんがスミ先生とは16年間ご一緒させていただきました。スミ先生は温厚な人柄で子供達からはおばあちゃんと慕われていました。朝一番に起きて、調理場に行きご飯を炊いてくれていました。私は、昭和31年4月から報恩学園に勤めさせていただき山下充郎先生のもとで沢山の事を教えていただきました。山下先生は小池先生の思いを引継ぎ子供達に最大の愛情を持って接していました。何事も子供達が第一と考えていました。「職員都合で物事を決めてはいけない。子供達にとってどうか」を考えるようにと常々言われていました。昭和37年、上野幌に移転しましたが、当時の上野幌は、のどかな田園風景で学園歌の歌詞そのものでした。子供達と散歩にでると牛が柵のそばに寄ってきていかにも珍しそうにモウーと鳴いてきたもので



100年を迎えるにあたって50年位前の学園の様子を少しだけお知らせします。（上野幌に引っ越す前）南14条西16丁目に学園がありました。児童の施設ですから入所していたのは子供です。職員は住み込みで子供達と寝食を共にしており、冬は各部屋にルンペンストーブ、トイレは汲み取り、洗濯はすべて手洗いと職員にとっては過酷な時代でした。子供達も一部屋に10人位一緒に寝ていました。でも夜は職員も一緒に部屋で寝ていて安心感があったように思いました。上野幌に引っ越して何が一番嬉しかったかという暖房がスチームになりストーブから解放された事でした。洗濯も大きな機械が入り、子供達も広々とした生活の場で8人部屋となったことです。その後、施設はどんどん大きくなり、子供から大人の方々への支援、入所、通所と様々な形態に変化し、利用して下さる方々の数も増えましたが、創立者の思いや理念を引き継いで今日があると思います。私も長い間お世話になりましたが、利用者の皆さんや父母の皆様のおかげで100年の歴史の中の半分以上も関わらせていただいた事に感謝の気持ちで一杯です。法人が大きく育ったのは支えてくださった皆様のおかげです。100年をひとつの節目として今後も皆様のご支援を頂きながら信頼される法人として進んでいってほしいと心から願っています。